〔個人研究〕

梵文和訳『サマーヨーガ・タントラ』第 2・3 章

伊集院栞、加納和雄、倉西憲一、ピーター・ダニエル・サント

1　はじめに

前稿（伊集院ほか 2019）に引き続き、本稿では『サマーヨーガ・タントラ』（*Sarvabuddhasamāyogaḍākinījālasaṃvara*）の第 2・3 章に対する梵文和訳を提示する[1]。第 2 章は「吉祥金剛薩埵の瑜伽の章」（śrīvajrasattvasaṃyogakalpa）、第 3 章は「一切女尊たちの結合による幸運吉祥三昧耶の章」（sarvadevīsamāyoga-subhagaśrīsamayakalpa）と題される。まず第 2 章は金剛薩埵を行者に憑依させて（āveśa、遍入）両者が不二となる次第を説き、つづいて第 3 章は金剛薩埵と不二となった行者が自身の周囲にダーキニーたちを出現させる観想の次第を説く。両章は内容的に連続する。すなわち、第 2 章は主尊である金剛薩埵、そして第 3 章はその眷属であるダーキニーたちについて、それぞれの生起次第を説く。また両章には構成上の対応関係もある。すなわち、尊格の観想、供養、功徳の三点が両章の骨格として配置されており、しかも両章には 6 偈半にわたって共通する偈頌が確認される（2.19cd ≈ 3.14cd; 2.22–23 ≈ 3.15–16; 2.24 ≈ 3.18）。両章の暫定的な科段は下記の通りである。なお参考としてプラムディタヴァジュラ注による科段を稿末【資料 3】に付した。

科段

第 2 章「吉祥金剛薩埵の瑜伽の章」

［2.1：導入］

［2.2–3：金剛薩埵の遍入］

1　前稿では本書がウッタラタントラ（続タントラ）と呼ばれる典拠を網羅したが、そこに見落しがあったため本稿末【資料 4】においてその資料を補足した。

［2.4–8：行者の振る舞い方］2.4cd–8 ≈ 理趣広経
［2.9–13：ムドラーと自身加持］
［2.14–17：行者の功徳］
［2.18–23：行者が受ける供養と享受］2.19cd ≈ 3.14cd, 2.22–23 ≈ 3.15–16
［2.24：瑜伽によって得られる功徳］2.24 ≈ 3.18
［2.25：まとめ］

第 3 章「一切女尊たちの結合による幸運吉祥三昧耶章」
［3.1：導入］
［3.2：金剛薩埵と三昧耶］
［3.3–7：金剛薩埵との瑜伽の威力によって生じるもの］Cf. 3.22–27
［3.8–10：ダーキニーについて］
［3.11–13：行者とダーキニー］
［3.14–17：ダーキニーたちによる供養］3.14cd ≈ 2.19cd, 3.15–16 ≈ 2.22–23
［3.18：瑜伽によって得られる功徳］3.18 ≈ 2.24
［3.19–21：五部族主の女尊たちとの遊戯および成就］
［3.22–27：今生における成就］Cf. 3.3–7

以下には第 2・3 章の梵文和訳を提示するに先立って両章の特筆すべき点を述べておきたい。すなわち、本書と『理趣広経』とに共通する平行偈、両章で扱われる五種のヨーガという概念、および五部族について述べる。また本稿の末尾には四点の資料を附し、順次、梵文テクストの異読リスト、諸注釈の対照表、プラムディタヴァジュラ注による科段、プラシャーンタミトラ注の冒頭箇所の記述を提示する。

第 2 章と『理趣広経』

『サマーヨーガ』は、『理趣広経』と並び、ヨーギニー・タントラの草分け的な存在といわれている[2]。それゆえ両書の形成過程を解明することは、ヨーギニー・

[2] 伊集院ほか 2019: 64。

タントラの形成そのものを繙く上で鍵となる。両書は互いに密接な関係を有し、共有される偈頌も少なくない。前稿では第１章の中で両書に共有される偈頌（1.12–15）をとりあげたが[3]、今回扱う第２章にも共通する偈が確認される。すなわち『サマーヨーガ』2.4cd–2.8 がそれにあたる。まず『サマーヨーガ』2.4–2.8 は次の通りである。

> ここ（金剛薩埵との結合）においては、浄めもなく、制約もなく、苦行もなく、難行もない。諸々の難行なしに、諸々の制約なしに、諸々の安楽をともなって、諸々の喜びをもって、［金剛薩埵との結合による一切仏の境地が］成就する。[2.4]
> それゆえに、望むままに振る舞い、何でも食べて、何でも行い、欲のままに行為をなして、好きなままに行動し、[2.5]
> 立ち上がっていても、座っていても、歩いていても、好きなように、笑い、つぶやき、どこでも、あらゆる仕方で、[2.6]
> 曼荼羅に入壇していなくても、あらゆる障害を伴っていても、本尊との瑜伽を本質とする者は、たとえ福徳が微弱であっても、成就する。[2.7]
> この真実との瑜伽（上記の遍入または禁戒）によって、じつに全てを成就する者は、どんな悪食によっても、悪行によっても、どうあっても損なわれることはない。[2.8]

これに対する『理趣広経』の平行偈（太字）は下記の通りである[4]。和訳に続き、

3　前稿の指摘した、この『サマーヨーガ』1.12–15 と『理趣広経』との対応箇所は、『理趣広経』（D488, 205b–206a）に現れる百八名讃の内容ともよく対応している。百八名讃の梵文は、例えばアーナンダガルバの『ヴァジュラジュヴァーローダヤー』（Skt. Ms. fol. 173v2–179r3）に確認される。

4　以下に見る『理趣広経』の文言は全て、同経第３篇「吉祥最勝本初」第 11 章中の「極秘密一切瑜伽儀軌」（D488, 241a1–243b2）に説かれるものである（『理趣広経』の章立ては田中 2010: 177 を参照）。アーナンダガルバ注に従い、仮に科段を付すならば次の通り。

1. 導入（D488, 241a1–3. *Ṭīkā* D 2512, i, 89a1–90a7）、2. アヌヨーガ（241a3–4. *Ṭīkā* 90a7–b3）、3. サルヴァヨーガ（241a4–b1. *Ṭīkā* 90b3–92a4）、4. ヨーガとアヌヨーガの観想法（241b1–2. *Ṭīkā* 92a4–b7）、5. サルヴァヨーガの観想法（241b2–4. *Ṭīkā* 92b7–93a7）、6. マハーヨーガ（241b4–6. *Ṭīkā* 93b1–94a5）、7. アティヨーガ（241b6–243a2. *Ṭīkā* 94a5–98a2）、8. ヨーガのみを結ぶこと（243a2–4. *Ṭīkā* 98a2–b4）、9. アヌヨーガを結ぶこと（243a4–5. *Ṭīkā* 98b4–99a1）、10. サルヴァヨーガ・マハーヨーガ・アティヨーガを結ぶこと（243a5–6. *Ṭīkā* 99a1–5）、11. 五種のヨーガを授かる資質（243a6–b2. *Ṭīkā* 99a5–b5）

ここには五種のヨーガの語が全て登場し、『サマーヨーガ』との平行偈は「7. アティヨーガ」に含まれる。

蔵訳テクストおよびそれに対応する『サマーヨーガ』の梵本を添えて示す。

それゆえに、あらゆる努力をもって、ムドラーの瑜伽を成就させるべし。
難行なしに、制約（niyama）なしに、安楽および喜びをもって成就すべし。
[≈ *Samāyoga* 2.4cd]
（中略）
そこにおいて、その一切三昧耶瑜伽の成就とは何かというと［次の通りである］。
難行という罪過に耐えられないので、苦行者は瞬時に干上がってしまう。
苦により［彼の］心は散乱し、瑜伽に専念することがない。
それゆえに、望むままに振る舞い、何でも食べて、何でも行い、欲のままに行為をなして、好きなままに行動し、[≈ *Samāyoga* 2.5]
歩いていても、笑い、つぶやき、どこでも、あらゆる仕方で、[≈ *Samāyoga* 2.6bcd][5]
曼荼羅に入壇していなくても、あらゆる障害を伴っていても、本尊との瑜伽を本質とする者は、言葉によってもそのようになる。[≈ *Samāyoga* 2.7abc][6]
この真実との瑜伽によって、じつに全てを成就する者は、どんな悪食によっても、悪行によっても、どうあっても堕落することはない。[≈ *Samāyoga* 2.8]
一切大欲を自己とする者は、最勝の自在者として成就するだろう。［彼は］一切持金剛王、一切最高にして最勝なる自在者［となる］。
仏菩薩のこの境地が、この瑜伽によって容易に得られるならば、その他の諸々の悉地や最高の行い等については言を俟たない。
最高に有意義なる成就および一切のムドラーの成就をもたらす、吉祥なる、一切の苦を取り去ったこの瑜伽は、不変かつ最高のものである。
このように最高安楽なる世尊金剛薩埵が仰った。

---

5 『サマーヨーガ』2.6a に対応する句は、『理趣広経』蔵訳には欠けているが、アーナンダガルバの『理趣広経注』所引の本文には存在する（D2512, i, 97b6）。
6 『サマーヨーガ』2.7d は「たとえ福徳が微弱であっても成就する」と読み、d 句のみ『理趣広経』は異なる読みを示す（tshig gis kyang ni de bzhin ’gyur）。この d 句には「言葉によってもそのようになる」と訳をつけたが、その意味は不明である。

（理趣広経蔵訳 D488, 242b1–2, 242b4–243a1 およびサマーヨーガの対応偈）

de phyir ’bad pa thams cad kyis || phyag rgya rnal ’byor rjes grub byed ||
dka’ thub med cing nges pa med || bde ba dga’ bas bsgrub par bya ||

cd ≈ aduṣkarair aniyamaiḥ sukhair harṣaiś ca sidhyati ||

（S*amāyoga* 2.4cd）

（中略）

de la dam tshig thams cad kyi rnal ’byor rjes su sgrub pa de gang yin zhe na ||
dka’ thub nyes pa mi bzad pas || sdug bsngal ldan pas myur du bskam ||
sdug bsngal gyis ni sems g-yeng ’gyur || rnal ’byor la ni sbyor ba min ||

（平行偈なし）

de phyir ci ’dod la spyod pa || kun za de bzhin thams cad byed ||
ci ’dod bya ba la spyod pa || ci ’dod par ni spyod pa spyod ||

≈ **tasmād yatheṣṭavyāpārī sarvabhuk sarvakṛt tathā |**
yathākāmakriyācārī yathārucitaceṣṭitaḥ || （S*amāyoga* 2.5）

gang dang gang du ’chag pa dang || dgod pa ’am ni smra ba ’am ||
gang yang de ru ji bzhin te ||

≈ utthito vā niṣaṇṇo vā **caṅkraman vā** yathāsthitaḥ |
prahasan vā prajalpan vā yatra tatra yathā tathā ||

（*Samāyoga* 2.6）

dkyil ’khor du ni ma zhugs sam || sgrib pa rnams dang ldan pa ’am ||
rang gi lha yi rnal ’byor bdag | tshig gis kyang ni de bzhin ’gyur ||

≈ **amaṇḍalapraviṣṭo vā sarvāvaraṇavān api** |
svādhidaivatayogātmā mandapuṇyo ’pi sidhyat || （*Samāyoga* 2.7）

de nyid rnal ’byor ’di yis ni || thams cad nyid ni bsgrub par bya ||
ngan spyod sdig pa thams cad kyis || rnam pa kun tu gnod mi ’gyur ||

≈ **anena tattvayogena sādhayan sarvam eva hi** |

durbhuktair duṣkṛtaiḥ sarvaiḥ sarvathā na praduṣyati ||

(*Samāyoga* 2.8)

’dod pa chen po kun bdag nyid || dbang phyug dam pa ’grub par ’gyur ||
thams cad rdo rje ’dzin rgyal po || kun mchog dbang phyug dam pa ’o ||

（平行偈なし）

第 2 章について両書に共通する偈は以上の通りである。そしてこれら平行偈が現れる文脈を、両書においてそれぞれ確認して比較してみると、その大枠はよく似ていることが知られる。すなわち『サマーヨーガ』では、金剛薩埵と行者が一体化する瑜伽を説き、その瑜伽が「ほかならぬ安楽によって」（sukhenaiva, 2.3a）為されるべきと述べてから、苦行などは一切不要である旨を語る一連の平行偈（2.4cd–2.8）が続く。一方の『理趣広経』は、「ムドラーヨーガ」（phyag rgya rnal ’byor）において、本尊と行者との一体化をより堅固にするためには安楽のみが必要であり、苦行は一切不要だと断言し[7]、その後に当該の平行偈（苦行不要論）が続く[8]。アーナンダガルバの『理趣広経注』はこれら平行偈を理解するうえで有益であるため、本稿の訳注において適宜、該当箇所を訳出して添えた。

このように両書は、本尊瑜伽を堅固にするためには安楽のみが必要である

---

7 『理趣広経』（242a7–b1）の次の二偈がそれにあたる。「［尊格の］御身体がムドラーである。堅固であるから。それは、安楽によって堅固となる。［しかし］苦［を伴う行］によって［瑜伽者の心は］散乱し、もしくは［自ら］死を得ることになる。それは、瑜伽の心から生じ、安楽なる意によって成就する。［しかし］不快なる意によるならば［瑜伽者の心は］散乱し、もしくは、滅を得ることになる」。

アーナンダガルバの『理趣広経注』は、上二偈のうちの第一偈所説の、瑜伽者が苦によって心乱れて自殺する理由について次のように説明する。「なぜかというと、苦を伴う瑜伽者は、心が散乱して、動揺するようになるからである。あるいは、輪廻が何の役に立つだろうかと考えて、苦に押し潰されて自殺してしまう」（D2512, i, 96b7）。そして第二偈の後半句所説の、瑜伽者が不快なる意により滅を得ることについては、「声聞と独覚の無余依涅槃の獲得を発動することになってしまう」（D2512, i, 97a2）と説明し、「滅」とは無余依涅槃を指すと解釈する。つまり瑜伽者は苦行をなすならば心が散乱し、その帰結として自殺や声聞の涅槃に至ってしまうことを述べて苦行の過失を強調する。

8 『理趣広経』はこれらの一連の平行偈の末尾に次のような『サマーヨーガ』には無い偈頌を説く。「最高に有意義なる成就と、一切のムドラーの成就をもたらす、吉祥にして一切の苦を取り去ったこの瑜伽は、不変にして最高のものである」。アーナンダガルバの『理趣広経注』はこれを釈して、「吉祥にして一切の苦を取り去ったこの瑜伽とは、このアティヨーガが苦などから離れていることである」（D2512, i, 97b7–98a1）という。つまり苦を排した安楽によるこれらの実践は、アティヨーガを主題としているとする。

が、苦行は不要であると説く点で軌を一にする[9]。そして両書とも苦行不要論を述べた後に、本尊瑜伽に続くアヌヨーガなどを説く点も一致する。そしてその文脈において両書は、下記の五種のヨーガおよびその祖型を説く。

五種のヨーガ

『サマーヨーガ』2•3 章には、ヨーガ、アヌヨーガ、サルヴァヨーガ、マハーヨーガ、アティヨーガという五種のヨーガが登場する（特に後四者は 2.23、3.8、3.17）。当該文脈においてそれらの語は、明確な定義は与えられず、あたかも既知の術語であるように使用されるため、本文の記述だけからその正確な意味を把握することは困難である（なおこれらは後代のニンマ派の九乗の教えの末尾に挙がるマハーヨーガ、アヌヨーガ、アティヨーガの祖型となった可能性がある）。その和訳を提示すると下記の如くである。

> アヌヨーガにより［自身を］供養せよ。また、サルヴァヨーガの安楽を経験する者は、アティヨーガにより自らを成就する。[2.23 ≈ 3.17]
> その者（金剛薩埵と合一したその者）にとって、彼女（女尊、ダーキニー）たちは、三昧耶から生じ、愛おしく、自己の三昧耶に随順し、アティヨーガとマハーヨーガを通じて全てを本質とする者（金剛薩埵）の最勝の三昧耶を有する。[3.8]

これらの語彙の本来の意味を知るためには先ず、『サマーヨーガ』の諸注釈書の中でも最古のアーナンダガルバ注を参照する必要があるが、同注釈書は散逸して伝わらない[10]。しかしアーナンダガルバの『理趣広経注』には関連する詳しい内容が確認されるため、それを参照することよってこの欠を補うことができる（後述）。

『サマーヨーガ』の注釈群の中で、散逸したアーナンダガルバ注に次いで古

9　これらの議論は、『秘密集会』第 7 章とも密接な関係がある。例えば *Sūtakamelāpaka* 第 9 章は『理趣広経』と『秘密集会』を一緒に引用し、さらに『サマーヨーガ』にもとづいた行（caryā）を説く（Wedemeyer 2007: 459-479 参照）。

10　伊集院ほか 2019: 68。

いと言われるのが、9 世紀頃に成立したとされるプラシャーンタミトラの注釈である。プラシャーンタミトラは、2.23 について以下のように注釈する。「**サルヴァヨーガの安楽を自ら経験する者**とは、自ら、前述のアヌヨーガによって供養して、アティヨーガ[11] によって成就する［者］である。**アティ**とは、安楽の歓喜である。一切女尊たちとの瑜伽を特質とする**アティヨーガ**に至るまでを得ることになる」(D 1663, 64b7–65a1)。すなわち「アティヨーガ」を「一切女尊たちとの瑜伽を特質とするもの」と理解し、「アヌヨーガ」を遍入による行者と金剛薩埵との合一を意味すると理解している[12]。

またプラシャーンタミトラは 3.8 について次のように言う。「**アティヨーガ**とは、女尊と一体化することである。それ自体が**マハーヨーガ**であり、アティヨーガに至るまでの間［の諸々のヨーガ］のことである」(D1663, 65b2)。

一方で、やや時代を下るとみられる注釈家、プラムディタヴァジュラは、次のように解説する。「**アヌヨーガ**（2.23a）は方便の輪と智慧の輪の合一であり、楽により供養するならば成就する」(D1660, 394b3–4)、「**アティヨーガ**（3.8c）とは、幻の如くなりと知ることである。**マハーヨーガ**（3.8c）とは、光明を本性とするものなりと知ることである」(D1660, 395a6)。この他にも『サマーヨーガ』の注釈は存在するが紙幅の都合上、割愛する。

さて先述の如く、五種のヨーガのうち幾つかは『理趣広経』にも登場し、『理趣広経』に対するアーナンダガルバの注釈は五種のヨーガ全てについて詳述する。まず注釈の対象となる『理趣広経』本文を提示する。

> 次にまた、最上秘密一切瑜伽儀軌を説くべし、と世尊金剛薩埵が仰った。それ（最上秘密一切瑜伽儀軌の語）には、最初にまず、意味あるものとして、「瑜

11　lhag par sbyor ba は shin tu sbyor ba の間違いとして理解し、訂正した。蔵訳者が見た梵本には atiyoga ではなく adhiyoga と誤記されていた可能性がある。

12　プラシャーンタミトラは、第 1 章がヨーガを、第 2 章がアヌヨーガを、第 3 章がアティヨーガを主題とすると解釈する（D1663, 63b4–5, 65a3–4）。また 2.1 の注釈で以下のように述べている。「以上のように［第 1 章で］五現等覚次第を通じて、金剛薩埵がヨーガを本質とすると説明したのである（中略）智薩埵が内に融解することを前提として、世尊がアヌヨーガという本質をともなって留まっていると説くために、**かの世尊にして、瑜伽であり**（2.1a）云々と言う」(D1663, 63b4–5)。すなわち、ヨーガを五相成身観に、アヌヨーガを智薩埵の遍入に結び付けて理解している。

伽（yoga）」という語基（dhātu）がある。これはまた、「励むこと」というのが、語基の意味である。

何によって励むのか、と言うならば、いわく、本尊の想念（観想）に専念することによって、瑜伽する（つまり励む）のである。また別の［表現である］、正しい収斂（yang dag par bsdu ba）と正しい平等瑜伽（yang dag par kun tu sbyor ba）と正しい瑜伽（yang dag par sbyor ba）が、「瑜伽」という表現の同義語である[13]。

この『理趣広経』本文に対してアーナンダガルバは注釈を施しながら、ヨーガ、アヌヨーガ、サルヴァヨーガ、マハーヨーガ、アティヨーガという五種のヨーガを一つずつ説明する。

まず「何によって励むのか」という文言を釈す中で、「本尊の随念を対象とする心の生起」が、ヨーガであると簡便に述べた後（D2512, i, 89a6）、それを詳しく述べて、月輪の上に金剛杵を観想し、さらにそこから自身を金剛薩埵として観想して一体化する観想の次第（五相成身観に準じるか）が、ヨーガであると説明する（89a6–b5）。

次に、智薩埵を行者自身に遍入（āveśa）させて、あたかも銅を銀に変化させる錬金術の如くに自身を尊格に変化させて一体化させる次第が、アヌヨーガであると説く（89b6–7）。そして、自身を、動・不動の一切の存在の姿を持つ本尊

---

13 『理趣広経』D488, 241a1–3: de nas mchog tu gsang ba'i rnal 'byor thams cad kyi cho ga rjes su bshad par bya'o zhes bya ba bcom ldan 'das rdo rje sems dpas gsungs so || de la thog ma kho nar re zhig don yod pa'i phyir ni rnal 'byor gyi skad kyi dbyings so || 'di yang brtson pa yin no zhes bya ba ni skad kyi dbyings kyi don to || gang gir (read: gis) brtson pa yin zhe na | smras pa rang gi lhag pa'i lha rjes su dran par sbyor bas na rnal 'byor ro || slar yang gzhan ni yang dag par bsdu ba dang yang dag par kun tu sbyor ba dang | yang dag par sbyor ba zhes bya ba ni rnal 'byor brjod pa'i rnam grangs so ||

として観想し、智と悲が無碍となることが、サルヴァヨーガ[14]およびマハーヨーガ[15]であると説く(89b7–90a1)。さらに超越的貪欲(atirāga)を通じて前四者のヨーガを完成するもの、つまり女尊の観想に関与するものが、アティヨーガであると説く(90a1)。

さらにアーナンダガルバは、これら五種のヨーガのうちアヌヨーガを「正しい収斂」(yang dag par bsdu ba)とし、サルヴァヨーガを「正しい平等瑜伽」(yang dag par kun tu sbyor ba)として、アティヨーガを「正しい瑜伽」(yang dag par sbyor ba)と対応させる(90a1–7)。そこにおいてアティヨーガは「一切女尊との結合の観想および観想の果」であると述べる(90a6–7)。アーナンダガルバ注の記述をまとめるならば以下の通りであり、先にみたプラシャーンタミトラの理解と一致するところが多い。

・ヨーガ	本尊の随念、五相成身観
・アヌヨーガ	智薩埵の遍入による本尊との一体化
・サルヴァヨーガ	自己を全存在の姿を持つ本尊として観想すること
・マハーヨーガ	マンダラ諸尊の観想
・アティヨーガ	女尊との瑜伽

なお『理趣広経』はこれらのヨーガを授かる資質についても説く。

そこにおいて次のように説くべし。

これにより偉大なる御方(金剛薩埵)が成就する。この最勝の中でも最勝

14 『理趣広経』は上記の引用の後に以下のように述べる。「その[最上秘密一切瑜伽儀軌の語の]中で、「一切瑜伽(サルヴァヨーガ)」とはいかなるものかというならば、サマヤのヨーガが、サルヴァヨーガである、と言われている」(D241a4: de la ci ltar thams cad kyi rnal ’byor yin zhe na | dam tshig gi rnal ’byor ni thams cad kyi rnal ’byor zhe bya ba yin no ||)。これに対しアーナンダガルバは、「一切を本質とし、世俗諦を本体とする本尊がサマヤであり、それを本質とする観想が**サマヤのヨーガたるサルヴァヨーガ**と言われる」(D2512, i, 90b5)と注釈し、それは「全ての部族の[四]印の瑜伽により一体化する」(91b2–3)ことであると説明する。また「サルヴァヨーガを修習する瑜伽者は、他ならぬ動・不動の一切の事物の本質、すなわち自他の利益の福徳の積集を本質とする果を獲得する」(93a7)と述べている。

15 マハーヨーガについて、アーナンダガルバは、ヨーガ・アヌヨーガ・サルヴァヨーガとは別の観想であり、マンダラなどを成就するものであり(D2512, i, 93b1–2)、あらゆる成就を達成させるもの(94a4)とする。修習の内容は、同注釈の別の箇所(si, 100a5ff.; hi, 71a4ff. など)に詳説される。

なる自己自身こそが最上秘密であり、凡夫に語ってはならない。
金剛阿闍梨と最高の弟子は、自身の信解に応じて、サルヴァヨーガの儀軌が適合する。その他の人々には漸次に［その儀軌が与えられるべし］[16]。

これを釈してアーナンダガルバは、サルヴァヨーガ、マハーヨーガ、アティヨーガを「凡夫」（真実と法と三昧耶を知らず、信じない者）に語ることを禁じ、「最高の弟子」にのみその儀軌を授けるべしと説く（99a5–7）。そして阿闍梨は、「その他の人々」、つまり「最高の弟子」以外の、上中下いずれかの機根をもつ菩薩たる弟子たちに対しては、彼らがもつ信解力と聴聞力を把握したうえでその儀軌を漸次に与えるべきであり、一度に与えてはならないと釈する（99b3–4）。つまり弟子の機根に応じて、これらのヨーガの儀軌を授けるべきことを述べている。

以上は『理趣広経』に対するアーナンダガルバの説明であるが、彼の理解をそのまま『サマーヨーガ』の当該語句に適用した場合、『サマーヨーガ』本文の文脈とも大きく齟齬することはない。失われたアーナンダガルバによる『サマーヨーガ』注も、同様の理解を示していた可能性がある。

五部族

ダーキニーたちの生起次第を説く第３章は、曼荼羅の諸尊の存在を暗示するが、その記述は必ずしも明確ではない。とりわけ下記の［3.19–21：五部族主の女尊たちとの遊戯および成就］の箇所は、最勝馬（Paramāśva）を除く五部族（Vajrasattva, Heruka, Vairocana, Padmanarteśvara, Vajrasūrya）の存在を暗示する。

一切仏の大身をもち、一切仏の妙音を備え、一切仏の大心を有し、一切仏の大威力をもつ者（金剛薩埵）は、一切仏の大王にして（毘盧遮那）、一切持金剛の主（ヘールカ）、一切世自在主（蓮華舞自在）、一切宝主自在（金剛日）

16　『理趣広経』D488, 243a5–7: de la ’di ltar brjod bya ste || de nyid chen po ’di grub ste || mchog tu mchog gi bdag nyid ni || shin tu mchog tu gsang ba ste || so so’i skye bo la brjod min || rdo rje slob dpon slob ma mchog || de nyid dad pa’i rjes ’brang la || thams cad rnal ’byor cho ga sbyor || gzhan rnams la ni rims kyis so ||

にして、彼女たちと共に歓喜遊戯しながら、望みのままに、往来し、立ち上がり（yāty ety utpatati）、一切女尊たちにとっての成就者たる、転輪王として成就する（cakravartī prasidhyati）。[3.19–21]

上記和訳において括弧内に補足した五部族主の名前は、プラシャーンタミトラ注に従うものであるが、注釈抜きに偈頌のみを読んだ印象からも、同様の補足は可能であろう。このように第 3 章では五部族が暗示されるわけだが、後の第 6 章ではこれらに最勝馬を追加した六部族が明記される点を考慮すると[17]、五部族を暗示する部分と六部族を説く部分との間には、テクストに断層が存在する可能性もある。本書 6 章の和訳研究において稿を改めて詳述したい。

和訳について

『サマーヨーガ』の梵本としては Dhīḥ 本が刊行されているが、テクストに大きな問題を含むため、本稿の和訳は、共著者の一人であるサント氏が準備している校訂本にもとづく。なおサント氏の校訂本は、前稿で GSS 本[18] と呼称したものであるが、同氏が単独で刊行することになったため「サント本」と呼ぶことにする。ただしサント本は未刊行であるため、サント本と Dhīḥ 本との読みが異なる箇所については稿末の【資料 1】にまとめて示し、本和訳が依拠したテクストが確認できるように配慮した。梵文校訂に際しての校勘記はサント本に委ね、本稿では割愛する。

訳文中の角括弧は文脈上補った言葉を示し、丸括弧は補足的説明を示す。

なお必要に応じて、プラシャーンタミトラとプラムディタヴァジュラの注釈における理解を注記に示し、平行偈については『理趣広経』のアーナンダガルバ注も参照した。これら注釈において用いた太字は、タントラの本文を意味する。上記 2 種の注釈およびインドラナーラ注については各偈ごとの対応箇所の所在を稿末の【資料 2】に提示した。

17　プラシャーンタミトラ注は 6.9 に対して、金剛薩埵を中心とする六族のガナマンダラを詳細に解説する（D1663, 74a3–76b1）。

18　グリフィス、サンダーソン、サントの 3 氏の共著本を意味する。梵文写本および研究状況については、伊集院ほか 2019: 62–63 を参照。

和訳

第２章　吉祥金剛薩埵の瑜伽の章[19]

［2.1：導入］

2.1

じつにかの世尊にして、瑜伽であり、如来である、金剛薩埵は、一切仏との結合を通じたダーキニーの網からもたらされた最勝楽（sarvabuddha-samāyogaḍākinījālaśaṃvaraḥ）である[20]。

［2.2–3：金剛薩埵の遍入］

2.2

［行者が］金剛薩埵を自分自身として結合すれば（vajrasattvātmasaṃyogaḥ）、一切遍入[21]をなす者として成就する（sarvāveśaḥ prasidhyati）。［それは］一切仏との結合を通じた瑜伽自在性（yogaiśvarya）からもたらされる大楽である。

2.3

これにより、たやすく、ほかならぬ安楽によってのみ[22]（sukhaṃ sukhenaiva）、一切仏の境地を得る（sarvabuddhatvam āpnute）。つまり、一切仏との結合を通

19　他書に確認される第２章からのまとまった引用としては、例えば以下のものがある。2.14–19, 22: Indrabhūti, *Jñānasiddhi*, Chapter 15, Sarnath ed. 144, 6–19（cf. 高橋 1977: 12–13）、2.2–3ab, 2.4–8: *Caturaṅgārthāloka* (D1676, 255a5–6, 254b7–255a3)、2.20ef–24: *Śrīvajrasattvaguhyārthadharavyūha* (D1664, 133a1–3)。

20　2.1cd 句は本書のタイトルそのものであるが、その語義については伊集院ほか 2019: 70–72 を参照。

21　「一切遍入」（sarvāveśa）について、プラシャーンタミトラ注は以下のように説明する。「**金剛薩埵を自分自身として結合すれば**（2.2a）とは、眼前にいらっしゃるかの御方（金剛薩埵）と不二になってから、自身が**あらゆる仕方で**（thams cad du）尊格の身口意として顕れるので（snang bas）、**一切遍入**［という］」（D1663, 63b6–7）。

22　『理趣広経』の平行箇所では、本尊の瑜伽を堅固にするためには、安楽によって為す必要があり、苦によって為すならば逆効果となることを説く。ただし、sukhaṃ sukhenaiva は、「いともたやすく」とも訳しうる。

じた瑜伽自在性（yogaiśvarya）[23] からもたらされる大楽を［得る］。

［2.4–8：行者の振る舞い方］

2.4（cd は『理趣広経』との平行偈）

ここ（金剛薩埵との結合）においては、浄めもなく、制約もなく、苦行もなく、難行もない。諸々の難行なしに（aduṣkaraiḥ）、諸々の制約なしに（aniyamaiḥ）、諸々の安楽をともなって（sukhaiḥ）、諸々の喜びをもって（harṣaiḥ）、［金剛薩埵との結合による一切仏の境地が］成就する [24]。

2.5（『理趣広経』との平行偈）

それゆえに（tasmāt）[25]、望むままに振る舞い（yatheṣṭavyāpārī）、何でも食べて（sarvabhuk）、何でも行い（sarvakṛt）、欲のままに行為をなして（yathākāma-kriyācārī）、好きなままに行動し（yathārucitaceṣṭitaḥ）[26]、

2.6（『理趣広経』との平行偈）

立ち上がっていても（utthito vā）、坐っていても、歩いていても、好きなように

---

23 「結合を通じた瑜伽自在性」（yogaiśvarya）について、プラシャーンタミトラ注は以下のように説明する。「**瑜伽**とはそれに対して観想を行うことである。その**自在性**（aiśvarya）とは、あらゆる障害を離れることへの自在性を獲得することである。何よりも勝れた大自在者に至るまで［の自在性］よりもさらに無上なる楽、それが、**一切仏との結合を通じた瑜伽自在性**（yogaiśvarya）**からもたらされる大楽**（2.2cd）であり、それが**成就する**（2.2b）、と述べて（iti）、因果を設定しているのである」（D1663, 63b7–64a1）。

24 2.4cd は『理趣広経』に平行偈があり（本稿序文参照）、アーナンダガルバの『理趣広経注』は次のように注釈する。「その中で、行タントラに説かれた結跏趺坐という決まり事（niyama, 制約）が、**難行**（duṣkara）である。行タントラだけに説かれた、葉や牛糞（lo ma dang lci ba）から生じた麦や、乞食で得たものを食べることが、**決まり事**である」（D2512, 97a3–4）。行タントラにおける食事の決まり事は、例えば『蘇婆呼童子経』（D805: 121–122、cf. 大塚 2013: 865）などにあるが、上記の記述と一致するものは未確認である。

25 あるいは「それ（制約のないこと）にもとづいて」とも理解しうる。

26 2.5 も『理趣広経』に平行偈があり、それに対するアーナンダガルバの注は以下の通り。「tasmāt、つまり結跏趺坐などの決まり事から離れることによって、印を結んで自身加持をなしてから、その後に、**望んだままの**業（行動）を備え（cf. yatheṣṭavyāpārī）、**何でも食べる**（sarvabhuk）とは、瑜伽に適した食事を食べることである。［しかしそれらの食事は］罪があるので声聞などは食べない。なぜならば、制限（*avadhāraṇa）を彼ら（瑜伽者たち）は否定するからである。『秘密堅固至高共三昧章』（未詳）に説かれたゆえに。大印などの観想を為すので、**何でも行う**（sarvakṛt）のである。**欲のままに行為をなして**（yathākāmakriyācārī）というこの文言についての詳説するのが、**好きなままに行動し**（yathārucitaceṣṭitaḥ）である」（D2512, 97b3–5）。アーナンダガルバは 2.5a 冒頭の tasmāt を「その後に」と理解するが、文脈から判断して上記和訳ではそれに従わず、「それゆえに」という意味で理解した。

（yathāsthitaḥ）、笑い、つぶやき、どこでも（yatra tatra）、あらゆる仕方で（yathā tathā）[27]、

2.7（『理趣広経』との平行偈）

曼荼羅に入壇していなくても（amaṇḍalapraviṣṭo）[28]、あらゆる障害を伴っていても、本尊（svādhidaivata, 自己の至高神）との瑜伽を本質とする者は、たとえ福徳が微弱であっても、成就する[29]。

2.8（『理趣広経』との平行偈）

この真実との瑜伽[30]によって、じつに全てを成就するものは（sādhayan sarvam eva hi）[31]、どんな悪食によっても、悪行によっても（duṣkṛtaiḥ）、どうあっても損なわれることはない（praduṣyati）[32]。

［2.9–13：ムドラーと自身加持］

2.9–10

そのムドラーのやり方によって（yena mudrāvidhānena）刻印するならば（āmudraṇād）[33]、数億劫をかけても得られない最高なる一切仏の境地を獲得でき

27　2.6 も『理趣広経』に平行偈があり、それに対するアーナンダガルバの注は以下の通り。「それらのための振る舞いを威儀として述べる目的で、再度、同じ事柄を解説するために、**立ち上がっていても**（utthito vā）云々という。**どこでも**（yatra tatra）という文言によって、留まり方に決まり事がないことを説き示す。ある威儀を通じて観想を欲する人の、その人ごとの［やり易い］威儀によって、［実践を］なすので、**あらゆる仕方で**（yathā tathā）という」（D2512, 97b6–7）。また、この偈の内容は、unmattavrata (unmattakavrata) との関わりを想起させる。*Guhyasiddhi* 6.18 など参照。

28　つまり灌頂を得ていなくても。

29　2.7 は『理趣広経』に平行偈があるが、d 句が異なる。つまり『サマーヨーガ』が mandapuṇyo ’pi sidhyet と読むのに対して、『理趣広経』は tshig gis kyang ni de bzhin ’gyur と読む。またアーナンダガルバの『理趣広経』注には、この偈に対する注釈はない。

30　上記の遍入を指す。つまり tattvayoga とは、「真実（金剛薩埵）との瑜伽」を意味すると理解した。あるいは苦行を離れた振る舞い方を指すか。

31　2.8 も『理趣広経』に平行偈がある。それに対するアーナンダガルバ注は以下の通り。「**じつに全てを自我として成就するものは**（cf. sādhayan sarvam eva hi）とは、動不動のものからなる一切存在である」（D2512, 97b7）。

32　または「非難されない」とも訳しうる。

33　プラシャーンタミトラ注は次のように釈する。「**ムドラーのやり方で**（mudrāvidhānena）とは、尊像を面前に安置することによって［という意味］。**刻印することによって**（āmudraṇād）とは、内に融解することである」（D1663, 64a6）。なお、2.9c の āmudraṇād に対応する蔵訳は、bsgrubs na kun tu となっており一致しない。

る、そのような（taṃ）最高なる、自分自身（金剛薩埵）の成就法を、私（金剛薩埵）は示そう（kalpayiṣyāmi）。［つまり］一切仏との結合を通じたダーキニーの網からもたらされた最勝楽を。

2.11

金剛薩埵を自己として瑜伽した者は、遍入に応じた諸々の活動を通じて（yathāveśapravartanaiḥ）、遍く一切のムドラーを本質としており（viśvamudrātmā）、たとえ福徳が微弱であっても成就する（mandapuṇyo ’pi sidhyati）。

2.12

まさにこれ（ムドラー）で刻印すること（āmudraṇa）にもとづき、一切諸仏により加持される（adhiṣṭhyate）[34]。自身加持にもとづき（svādhiṣṭhānād）、一切仏の集会が（sarvabuddhasamāgamaḥ）必ず生じる。

2.13

一切仏の集会にもとづいて（sarvabuddhasamāyogāt）、［自身は］一切仏からなるもの（sarvabuddhamayo）となるだろう。そして一切仏からなるものとなれば、［自身は］一切仏として成就する（prasidhyati）。

［2.14–17：行者の功徳］

2.14

［一切仏と］結合したこの者を（enaṃ ... saṃyuktaṃ）[35]、あらゆる仕方で見て、供養する人たち（pūjayanti）、彼らによって（taiḥ）一切の諸仏は、まさに見られ（dṛṣṭās）供養された（pūjitāś）ことになるのである[36]。

34　ここでは韻律上 adhiṣṭhyate という語形が必要となる。この語形は他のタントラ文献にもみられる。正規の梵語では adhiṣṭhīyate に対応する。

35　つまり、遍入を行った者を指す。2.14a 冒頭の yainaṃ は、正規の梵語の連声では ya enaṃ となる（ye と enaṃ の連声、ye は taiḥ に呼応する）。ここでは韻律の要請により double sandhi が許容されていると理解した。なお yainaṃ について Dhīḥ 本は yena と読み、*Jñānasiddhi* は enaṃ と読む。

36　この偈の意味するところは、遍入をした者は仏と等しいので、彼にまみえたり供養したりする人々は、一切諸仏にまみえたり供養したりするのとまったく同じ福徳を得ることになる、ということである。

2.15

そして、この一切仏［なる瑜伽者］を見て触れるならば（darśanasparśanābhyāṃ）、曼荼羅に入壇していない者ですら（amaṇḍalapraviṣṭo ’pi）、真実を見るものたちとなるのである（dṛṣṭasatyā bhavanti hi）[37]。

2.16

そして［遍入を行った行者を］見て触れるならば、また、［その］声を聞いたり、あるいは思い描くなら（śravaṇasmaraṇena）、［彼らは］あらゆる罪過から解放され（sarvapāpair vimucyante）[38]、あらゆる悉地を備えることになる（yujyante sarvasiddhibhiḥ）[39]。

2.17

あるいは、この一切諸仏［なる瑜伽者］の、一切瑜伽の諸集会（sarvayoga-samāyogaiḥ）により[40]、女性たちですら[41]、解脱して（vimucyante）、そして仏菩提に触れることになる（buddhabodhiṃ spṛśanti）。

37　2.15b の cāsya と 2.15c の - praviṣṭo ’pi について、*Jñānasiddhi* は各々 vāsya、praviṣṭāś ca と読む。

38　このように尊格と一体化した瑜伽者に親近する人々が、尊格に親近した人と同じ功徳を得ることについては、例えば以下の様な用例がある（Somdev Vasudev 氏のご教示による）。*Mālinīvijayottaratatra*, Chap. 2 vv. 10–11「またそれら一切の真実を意味の通りに知る人、彼は、私（シヴァ神）と等しいグルであり、マントラの威力を明らかにする者であると言われる。歓喜せる心を持つその人によって、見られ、語られ、触れられた人々は、七つの生にわたって為された諸罪からさえも解脱する」（Vasudev 2004: 19: yaḥ punaḥ sarvatattvāni vetty etāni yathārthataḥ | sa gurur matsamaḥ prokto mantravīryaprakāśakaḥ || dṛṣṭāḥ saṃbhāṣitās tena spṛṣṭāś ca prītacetasā | narāḥ pāpaiḥ pramucyante saptajanmakṛtair api ||）。

39　yujyante について、*Jñānasiddhi* は pūjyante と読む。

40　プラシャーンタミトラ注は以下のように注釈する（64b1）。「**一切瑜伽の諸集会によって**とは、チャクラ（集会、曼荼羅）の姿形でもって留まることである」。またプラムディタヴァジュラ注は以下のように注釈する（394a4–5）。「**この一切諸仏の**云々という。**この**とは、ガナチャクラを修習 / 観想する瑜伽者および瑜伽女のことである。**一切諸仏の**とは、智薩埵と瑜伽者の**平等瑜伽によって**（samāyogaiḥ）、浄化する女尊と、灌頂の、そして勇者の、そして教誡を授ける女尊たちすらも、**解脱し菩提に触れることになる**」。このようにプラムディタヴァジュラは偈の sarvayogasamāyogaiḥ をガナチャクラを指すと解釈する。

41　プラシャーンタミトラ注（D1663, 64b2）：「**女性たちですら**（nāryo ’pi）という［文言において］、**すら**（api）という語は、男性もまた［いうまでもなく］解脱するはずで［あることを含意しており］、男性の姿を捨てた後に、女性を本質とする者へと変化するということである」。

［2.18–23：行者が受ける供養と享受］

2.18

どこでも、完全に、全く、あらゆる仕方で、いつでも（sarvatra sarvataḥ sarvaṃ sarvathā sarvadā）、自ずから（svayaṃ）、彼（瑜伽者）は、自分自身を（svam ātmānaṃ）一切仏からなるものとして成就していると（sarvabuddhamayaṃ siddhaṃ）みる。

2.19（≈ 3.14cd）

そして如来たちは、全てを本質とする者（金剛薩埵）として安立したこの者を（sarvātmasaṃsthitaṃ）、大雲のように広がり重なったあらゆる供養の品々により（sarvapūjāmahāmeghavyūhaprasarasaṃcaya）供養する。

2.20

あまねく（sarvato）一切仏を自己とする者は（sarvabuddhātmā）、全てを本質とする者（行者 / 金剛薩埵）への供養に専念し（sarvātmapūjāyogaḥ）[42]、吉祥金剛薩埵の最高の境地（śrīvajrasattvatvam uttamam）つまり最勝楽（śaṃvaram）を得る。そして一切と瑜伽した者（金剛薩埵）の享楽によって（sarvayogopabhogais）、四倍の吉祥（財産）（śrī caturguṇā）が成就する[43]。

2.21

じつに、一切と瑜伽した者（sarvayogo）は、世尊金剛薩埵にして如来である。彼（金剛薩埵）の享受は（tasyopabhogaṃ）、余すところなく（aśeṣataḥ）、三界全体に及ぶ。

42　サント本に提示される写本の読み sarvātmapūjāyoga を、文脈により sarvātmapūjāyogaḥ と読む。

43　プラシャーンタミトラ注は以下のように注釈する（D1663, 64b4–6）。「**全てを本質とする者**（2.20a）とは一切によって囲繞され、あらゆるものを自我として修習する者のことである。なぜならそれを自我としているからである。世尊金剛薩埵は一**切と瑜伽した者**（sarvayoga-, 2.20e）である。その者（一切と瑜伽した者）の**享楽**（upabhoga, 2.20e）とは、その者としての自我意識（ahaṃkāra）による享楽のことである。それによって、**吉祥は四倍となる**（śrī caturguṇā, 2.20f）とは、金剛薩埵の寿命、若さ、無病、大楽のことである（śrīvajrasattvāyuryauvanārogyasatsukham, cf. 2.24, 3.18）」。なお注釈の蔵訳の不備と思われる箇所は、内容に従って梵文を想定して和訳したため、蔵訳からの直訳となっていない部分もある。注釈は「全てを本質とする者」を行者、「一切と瑜伽した者」を金剛薩埵を指すと理解する。行者は遍入を通じて金剛薩埵と一体化しているため、両者は不二である。なお śrī catruguṇā の同注釈者の理解は一つの解釈に過ぎず、上記和訳はそれに従っていない。この語は 9.296 にも登場する。

2.22　（≈ 3.16, 9.512）

そして奉持されつつある（sevyamānair）一切と瑜伽した者（金剛薩埵）の享受によって（sarvayogopabhogais）[44]、楽に応じて（yathāsukham）、本尊との瑜伽によって（svādhidaivatayogena）、自分自身を供養すべきである。

2.23　（≈ 3.17, cf. 9.513）

アヌヨーガにより［自身を］供養せよ（pūjayed anuyogena）[45]。また、一切と瑜伽した者（金剛薩埵）の安楽を（sarvayogasukhāni）経験する者は（samāsvādayamānaḥ）、アティヨーガにより自らを成就する（svam atiyogena sidhyati）[46]。

［2.24：瑜伽によって得られる功徳］

2.24（≈ 3.18）

そしてこの一切仏を自己とする者のラサーヤナからもたらされる安楽によって（sarvabuddhātmarasāyanasukhena）[47]、吉祥金剛薩埵の寿命と若さと無病と最高楽が（chrīvajrasattvāyuryauvanārogyasatsukham）成就するだろう（siddhyec）。

［2.25：まとめ］

2.25

どこでも、完全に、全く、いつでも、この者は（asau）、一切仏との結合を通じたダーキニーの網からもたらされる最勝楽として（sarvabuddha-samāyogaḍākinījālaśaṃvaram）成就する。

44　*Jñānasiddhi* は sarvabhogopabhogaiś 読む。プラシャーンタミトラ注は「その**享受**とは、彼（金剛薩埵）としての自我意識による享受である」と釈する（D1663, 64b5）。

45　3.17 とほぼ同じ。ただし a 句の pūjayed については、pūjayann とある。

46　詳細は本稿序文を参照。

47　プラシャーンタミトラは以下のように注釈する（D1663, 65a1–2）。「**一切仏を自己とする者**（sarvabuddhātma-）とは、本尊の本質あるがままのことである。彼による供養によって、**ラサーヤナ**（rasāyana）**に応じた安楽**がある（sukha）。**一切仏を自己とする者によるラサーヤナ**とは、その安楽によって（sukhena）金剛薩埵と結合（瑜伽）すること（saṃyoga）であり、智薩埵と結合（瑜伽）することである」。

このように世尊金剛薩埵は仰った（ity āha bhagavāñ chrīvajrasattvaḥ）。

『サルヴァブッダ・サマーヨーガ・ダーキニージャーラ・サンヴァラ』の中から、吉祥金剛薩埵の瑜伽の章（chrīvajrasattvasaṃyogakalpo）、第 2、了。

第 3 章　一切女尊たちの結合による幸運吉祥三昧耶章 [48]

［3.1：導入］

3.1

じつにかの世尊にして、瑜伽であり、如来である、金剛薩埵は、一切仏との結合を通じたダーキニーの網からもたらされた最勝楽である。

［3.2：金剛薩埵との結合］

3.2（cf. 3.11）

吉祥金剛薩埵との結合をなす者は（śrīvajrasattvasaṃyogaḥ）、吉祥にして、自己の三昧耶であり（svasamayaḥ）、安楽である。［それは］一切仏との結合を通じた瑜伽自在性（yogaiśvarya）からもたらされる大楽である [49]。

［3.3–7：金剛薩埵の瑜伽の威力によって生じるもの］[50]

3.3

まさに吉祥金剛薩埵との結合 [51] の威力によって、あまねく、自ずから、あ

48　他書に確認される第 3 章からのまとまった引用としては、例えば以下のものがある。3.3–15: Ānandagarbha, *Paramādyaṭīkā* (D2512, 94b3–95a3, 3.7ab は欠)、3.15–21: Kukkurarāja, *Sarvamaṇḍalānusāreṇa Pañcavidhi* (D1670, 171a5–b1)、3.16–21: Āryadeva, *Sūtakamelāpaka*, Chapter 9 (Wedemeyer 2007: 477,12–478,8)。

49　プラムディタヴァジュラ注は、3.2 以降の偈頌を、金剛薩埵以下のサマーヨーガの六族に当てはめて解釈する。すなわち、3.2 を金剛薩埵、3.3 を毘盧遮那、3.4 をヘールカ、3.5 を蓮華舞自在、3.6 を金剛日、3.7 を最勝馬に配当する。

50　3.3–3.6 の各偈はほぼ同じ文言から構成される。各偈の d 句にある文言がそれぞれ、mudrā、yoga、siddhi、aiśvarya となっている点のみが異なる。また 3.7ab 句も、3.3–6 の各前半句と一致する。

51　これは第 2 章に説示された金剛薩埵の遍入を指すか。ただしプラシャーンタミトラ注は以下のように述べる。「吉祥金剛薩埵のヨーガとアヌヨーガを行った瑜伽者によるアティヨーガが、**金剛薩埵との瑜伽**である」（D1663, 65a5）。

らゆるムドラーの諸の大楽が（sarvamudrāmahāsukhāḥ）、各々漸次成就する（pratyanusidhyante）[52]。

3.4
まさに吉祥金剛薩埵との瑜伽の威力によって、あまねく自ずから、一切**瑜伽**の楽の諸宴が、各々漸次成就する。

3.5
まさに吉祥金剛薩埵との瑜伽の威力によって、あまねく自ずから、一切**悉地**の楽の諸宴が、各々漸次成就する。

3.6
まさに吉祥金剛薩埵との瑜伽の威力によって、あまねく自ずから、一切**自在**の楽の諸宴が、各々漸次成就する。

3.7
まさに吉祥金剛薩埵との瑜伽の威力によって、虚空界のように際限のない（ākāśadhātvaparyantā）[53]、最勝の女性（ダーキニー）たちが、あまねく生じる。

［3.8–10：ダーキニーについて］

3.8
その者（金剛薩埵と合一したその者）にとって、彼女（ダーキニー）たちは、三昧耶から生じ、愛おしく、自己の三昧耶に随順し、アティヨーガとマハーヨーガ[54]

52　3.3 は Dhīḥ 本に欠落しているが、Dhīḥ 本が基づいた写本には存在する。3.3d の sarvamudrāmahāsukhāḥ については、3.4–3.6 を鑑みて複合語として理解した。なお 3.3cd 句は *Pañcakrama* 3.41cd（Tomabechi 2006: 162）と対応し、こちらの文脈では sarvamudrā mahāsukhāḥ と分けて理解される（Tomabechi 2006: 163）。

53　サント本の底本写本、Dhīḥ 本の底本写本、および蔵訳（nam mkha'i dbyings kyi mtha' yas pa'i）は、dhāt**u**paryantā という読みを支持するが、当該の文脈および本書の類例にもとづいて、dhāt**va**paryantā と訂正した。。

54　プラムディタ注（D1660, 395a6）は、アティヨーガを「幻のごとし」として、マハーヨーガを「光明を本性とするもの」と解釈する。プラシャーンタミトラ注（D1663, 65b2）は、アティヨーガを「女尊とひとつになること」とする。詳細は本稿序文を参照。また 2.23 のアヌヨーガ・アティヨーガも参照。

を通じて全てを本質とする者（sarvātma-, 金剛薩埵）[55] の最勝の三昧耶を有する。

3.9

一切仏との結合瑜伽なすダーキニーたちは、ただ一人［金剛薩埵］にかんして単一行をなす者たちであり [56]（ekasyaivaikacāriṇyaḥ）、行のパートナーたち、および行に従う者たちであり [57]（sahacaryānucarāḥ[58]）、愛おしく、眩く輝く（paramojjvalāḥ、最勝の光焔をもつ）。

3.10

女尊たちは、遍く一切の歓喜により、あらゆるムドラーの大楽を有し、王の一切の供養を持つ者たちであり、最勝であり [59]、究極に恒常である。

［3.11：行者とダーキニー］

3.11

吉祥金剛薩埵との結合なす者は、一切女尊との諸々の集会を伴い（sarva-devīsamāgamaiḥ）、遍く一切の幸運を有し、安楽なるものとして、各々漸次成就する。

［3.12–13：女尊たちのありかた］

---

55 「全てを本質とする者」についてプラシャーンタミトラ注（D1663, 65b2–3）は以下のように述べる。「一切のものを本質としているゆえに、全てを本質とする者（sarvātma-）であり、つまり金剛薩埵のことである」。

56 プラシャーンタミトラ注（D1663, 65b3–4）は次のように釈する。「**ある者にとって**とは、金剛薩埵のことである。金剛薩埵ただ一人について行をなすもの、つまり単独で進む習性を持つ者、それが**単一行をなす者**である」。

57 プラシャーンタミトラ注（D1663, 65b4）は次のように釈する。「**行のパートナー**とは、行を共にするゆえに、行のパートナーであり、四体の主要な女尊たちのことである。**行に従う者**とは、それ以外［の女尊たち］であり、彼女ら一切の集会である」。

58 sahacaryānucarāḥ は、古典文法で sahacaryo 'nucarāḥ に対応すると仮に理解した。sahacaryo が、sahacarī の複数主格形で「行のパートナー」を意味する例は、*Sūtakamelāpaka* (Wedemeyer 2007: 469) や、*Pradīpoddyotana* (Chakravarti 1984: 26) などにみられる。Wedmeyer 2007: 116 によると、sahacarī と anucarī はマハームドラーの成就法に出る二種の女性パートナーを指す。なお類似する表現は *Samāyoga* 6.82 に見られる（ekasyaikacarā siddhā sahacaryānucāriṇī | sadā sevyā sutattvena buddhabodhir anuttarā ||）。

59 3.10c の訳の理解は古典文法から逸脱するが、内容および蔵訳に従った。ただし別訳として 3.10cd: sarvapūjāḥ paraṃ rājño devyaḥ は、「一切の供養を持つ者たちであり、さらに（paraṃ）王の妃たちは」とも訳しうる。

3.12–13

まさにこれ（ムドラー）で刻印することにより、金剛薩埵を本尊として、虚空界のように際限がなく、大楽を有する一切女尊たちは、

一切瑜伽の楽（sarvayogasukha）により酔狂し、強烈かつ力強く（prasahya balasā）[60] 過失なき者たちとなって（anaghāḥ）、男性となった者たちと共に（puruṣāyitaiḥ）[61]、相互に恍惚となり（parasparapraharṣayā）[62]、歓喜遊戯する。

［3.14–17：ダーキニーたちによる供養］

3.14（cd ≈ 2.19cd）

そして［彼女たちは］全てを本質とする者（金剛薩埵）の一切の根（毛穴[63]）から流出した、大雲のように広がり重なったあらゆる供養の品々により供養する。

3.15

「おお安楽よ」という［言葉］から流出した、一切瑜伽の楽（sarvayogasukha）の灌ぎによって、そして、あらゆる種類の宝石によって、［彼女たちは］幻惑され[64]、奉持する（sevayanti）[65]。

3.16（cf. 2.22）

そして奉持されつつある、一切女尊の享楽をもって、意のままに（yathāsukham、楽に応じて）、自身と本尊との瑜伽を通じて自分自身を供養せよ。

3.17（≈ 2.23）

アヌヨーガにより［自身を］供養しつつ、また、サルヴァヨーガの安楽

60　balasā は BHSG 8.41 に従い単数具格として理解した。

61　「男性となった者たちと共に」(puruṣāyitaiḥ)は暫定訳。プラシャーンタミトラ注(D1663, 66a1)は、「**男性のありかたによって**とは、自分自身の、あるいは男性のように」と釈する。性交において、女性が男性の役割をすることを意味すると理解した。

62　-praharṣayā は女性名詞 praharṣā の単数具格と理解した。

63　プラシャーンタミトラ注（D1663, 66a1）参照。

64　プラシャーンタミトラ注（D1663, 66a3）は「**幻惑され**とは、入ること」と釈する。

65　または「奉持させる」。sevayanti は写本の示す読み。3.16b: sevyamāṇaiḥ とも関連すると理解した。一方で sevayanti を secayanti に訂正して、-sekhaiḥ と関連させて読み、「灌によって灌頂させる / 灌頂する」と理解することもできる。後者は蔵訳（dbang bskur ’gyur）も支持する。

(sarvayogasukha) を経験する者は、アティヨーガにより、自らを成就する[66]。

［3.18：瑜伽によって得られる功徳］

3.18（≈ 2.24）

また、この一切仏を自己とする者のラサーヤナからもたらされる安楽によって、吉祥金剛薩埵の寿命と若さと無病(āyuryauvanārogya)と最高楽が成就するだろう。

［3.19–21：五部族主の女尊たちとの遊戯および成就］[67]

3.19–21

一切仏の大身をもち、一切仏の妙音を備え、一切仏の大心を有し、一切仏の大威力をもつ者（金剛薩埵）は、一切仏の大王にして（毘盧遮那）、一切持金剛の主（ヘールカ）、一切世自在主（蓮華舞自在）、一切宝主自在（金剛日）にして[68]、彼女たちと共に歓喜遊戯しながら、望みのままに、往来し、立ち上がり（yāty ety utpatati）、一切女尊たちにとっての成就者たる、転輪王として成就する（cakravartī prasidhyati）[69]。

［3.22–27：今生における成就］

3.22–23

この者（瑜伽者）にとっては（asya）、これ（ムドラー）を通じて、今生において、全く成就しない（na sarvathā sidhyanti）、一切仏との結合による瑜伽自在性

66　本偈を以下のように訳することも可能か。「そして［その瑜伽者はそのように］アヌヨーガにより供養をして、サルヴァヨーガの諸楽を味わって、アティヨーガによって自らを成就する」。五種のヨーガについては本稿序文参照。なおsarvayogasukhaという表現は3.17b以外にも、2.17a, 2.23b, 3.4c, 3.13a, 3.15a, 3.26dなどに登場するが、全ての用例において同一の意味なのか否かは不明である。

67　序文参照。

68　プラシャーンタミトラ注（66a4–5）は次のように釈する。「**一切仏の大身をもち**云々とは、仏菩提などの四つのことである。**一切仏の大王にして**とは毘盧遮那のことである。**一切持金剛の主**云々とは、ヘールカなど三尊（ヘールカ・蓮華舞自在・金剛日）を示す」。一方、プラムディタヴァジュラ注（296a5）は次のように釈する。「それら［六部族のマハームドラー］のここでの説示は、身・語・心・供養・功徳の五つである（「大身、妙音、大心、大威力、大王」3.19a-20aに対応）。それら五つは、まとめると、持金剛たる心と、世自在たる語と、宝自在たる身の自体である（「持金剛主、世自在主、宝主自在」3.20bcdに対応）」。

69　プラシャーンタミトラ注（D1663, 66a6）は、cakravartinのcakraを六族の曼荼羅と理解する。「**転輪王として成就する**とは、六つの曼荼羅について自在なる者として生じることである」。

（yogaiśvarya）からもたらされた諸々の大楽なるもの（-mahāsukhāḥ）[70]、そのようなものは（ye… te）、なんら存在しない（na kecid）―［その大楽は］最高かつ広大であり（varodārā）法界と等しく無比であり（dharmadhātusamāsamāḥ）、虚空界のように際限のない、一切悉地の楽の宴である。（これらは必ずや今生で成就する。）[71]

3.24–25

この者（瑜伽者）にとっては、これ（ムドラー）を通じて、今生において、全く成就しない、一切仏との結合による瑜伽自在性からもたらされる諸々の楽の宴なるもの、そのようなものは（ye… te）、なんら存在しない（na kecid）―［その楽の宴は］最高かつ広大であり、法界と等しく無比であり、虚空界のように際限のない、一切自在性の楽の宴である。（これらは必ずや今生で成就する。）

3.26–27

この者（瑜伽者）にとっては、これ（ムドラー）を通じて、今生において、一切仏との結合を通じたダーキニーの網からもたらされる諸々の最勝楽によって[72]、全く成就しない諸々の事は（ye… te）、なんら存在しない（na kecid）―［それは］最高かつ広大であり、法界と等しく無比であり、虚空界のように際限のない、一切瑜伽の楽の宴である。（これらは必ずや今生で成就する）。

70　3.23cd の -mahāsukhāḥ で終わる一句は、所有複合語ではなく、格限定複合語（男性形複数の名詞）として理解した。3.17b などにある -sukhāni という中性名詞の語形とは齟齬するが、3.3d に出る男性名詞としての -mahāsukhāḥ とは一致する。なお蔵訳は、-sukhotsavāḥ (3.22d) を中心的な名詞として理解し、-mahāsukhāḥ (3.23d) を *-mahāsukhaiḥ として訳す。後者は同様の文章構造をもつ 3.27d の複数具格と一致する。

71　プラシャーンタミトラ注（6a6–7）は 3.22 について以下のように釈する。「**広大**（udara）とは、大いなる徳性のことである。**最高**（vara）とは、出世間ということである。**一切悉地の楽の宴**（sarvasiddhisukhotsavāḥ）とは、虚空を行くなどの悉地（siddhi）の稀有なる**楽**（sukha）であり、**楽**の自在者とは、金剛薩埵や毘盧遮那などを本質とするものであり、それ自体が**宴**（utsava）である」。

3.22–23 は、以下に続く 3.24–25 および 3.26–27 とほぼ同文である。それらのごくわずかな差異を挙げると、たとえば以下の点がある。22d: siddhi、24d: aiśvarya、26d: yoga。これらは、3.3–6（これらもほぼ同文の反復である）において順次登場する（mahāmudrā, yoga, siddhi, aiśvarya）と対応関係をもっていると思われる。

72　3.27 の -śaṃvaraiḥ は、蔵訳によっても支持されるが、一方で、この偈が 3.23cd, 3.25cd と同じ構文であることを考慮するならば、-śaṃvarāḥ という語形が期待され、それは 3.27a の sidhyante の主語となると考えられる。

プラシャーンタミトラ注（66a7–b1）は以下のよう釈する。「ḍākinījālaśaṃvaraiḥ とは、虚空行（khecara）などの悉地の稀有なる楽を伴って、前述の女尊たちと共に平等瑜伽を為すための資質 / 幸運（skal ba bzang po）であり、一切女尊たちと集会をなす金剛薩埵こそが資質を持つ者である」。

このように世尊吉祥金剛薩埵は仰った[73]。

『サルヴァブッダ・サマーヨーガ・ダーキニージャーラ・サンヴァラ』の中から、一切女尊たちの結合による幸運吉祥三昧耶章（sarvadevīsamāyogasubhagaśrī-samayakalpas）、第 3。

【資料 1：サント本と Dhīḥ 本の異読リスト】

本稿の梵文和訳はサント本を底本とした。既刊の Dhīḥ 本の読みがサント本と齟齬する場合、Dhīḥ 本の読みを採用せずサント本の読みを採用した。下記にはそれらの異読を列挙する。

凡例

・Dhīḥ 本の読み → サント本の読み

・半偈ごとに異読を挙げる。但し連声の異読は原則として報告しない。

第 2 章

＊サント本は第 20 偈を 6 パーダとしているため、Dhīḥ 本とはそれ以降、半偈分ずれている。

2.1–3 異読なし

2.4 ab: nātra ’sauca → nātra śaucaṃ

2.5 ab: yatheṣṭavyāpārīsarvatrakasarvaksaṃ

→ yatheṣṭavyāpārī sarvabhuk sarvakṛt

cd: yathābhuvi tathā → yathārucitaceṣṭitaḥ

2.6 ab: yathā sthitaḥ → yathāsthitaḥ

2.7 cd: svādhidevatayogātmāmandapuṇyo ’pi

73 プラシャーンタミトラ注（66b1–2）は以下のように釈する。「彼自身が吉祥であり、つまり女尊たちにとって［吉祥である］。逸脱してはならないので、三昧耶である。それを言葉によって理解させるので、この［第３］章（kalpa）において、そのように仰ったのである」。

→ svādhidaivatayogātmā mandapuṇyo ’pi

2.8　ab: sādhayet → sādhayan

2.9　ab: mudrā vidhānena aprāpya → mudrāvidhānena aprāpyaṃ

2.10　異読なし

2.11　ab: vajrasattvātmasaṃyoga- → vajrasattvātmasaṃyogo

2.12　異読なし

* 本稿ではサント本を次のように変更する。

anayā mudraṇād（サント本）→ anayāmudraṇād

2.13　cd: sarvabuddha → sarvabuddhaḥ

2.14　ab: yena → yainaṃ（*double sandhi*）

cd: dṛṣṭāntaiḥ → dṛṣṭās taiḥ

2.15　ab: darśana sparśanābhyāṃ → darśanasparśanābhyāṃ

* 単純な誤記

cd: maṇḍala apraviṣṭo → amaṇḍalapraviṣṭo

2.16　cd: pramucyante → vimucyante

2.17　ab: sarvabuddhasamāyogaiḥ → sarvayogasamāyogaiḥ

cāsya → vāsya

cd: nāryāpi → nāryo ’pi

2.18　異読なし

2.19　ab: sarvātmasaṃsthitaś caivaṃ → sarvātmasaṃsthitaṃ cainaṃ

cd: sarvapūjā mahā- → sarvapūjāmahā-

2.20　cd: saṃvaram → śaṃvaram

ef: śrīcaturguṇām（Dhīḥ 2.21ab）→ śrī caturguṇā

* Dhīḥ 本は 2.21ab とするため、これ以降、半偈分ずれる。

* 本稿では 20ab についてサント本を次のように変更した。

sarvātmapūjāyogaśrī-（サント本）→　sarvātmapūjāyogaḥ śrī

2.21　異読なし

2.22　ab: sevamānai（Dhīḥ 2.22cd）→ sevamānair

cd: svādhidevatayogena（Dhīḥ 2.23ab）→ svādhidaivatayogena

2.23　ab: pūjayennanu yogena sarvayoga sukhāni（Dhīḥ 2.23cd）
→ pūjayed anuyogena sarvayogasukhāni
cd: samāsvādayamānaś ca svayam atiyogena（Dhīḥ 2.24ab）
→ samāsvādayamānaḥ svam atiyogena
2.24　ab: anenasarvabuddhā-（Dhīḥ 2.24cd）→ anena sarvabuddhā-
cd: chrīvajrasattvāyuyauvanārogyato（Dhīḥ 2.25ab）
→ chrīvajrasattvāyuryauvanārogyasatsukham
2.25–27（章題）異読なし

第 3 章

* Dhīḥ 本はサント本の第 3 偈を含まない。
* Dhīḥ 本は第 16 偈以降、誤記により、偈番号に混乱がある。
* Dhīḥ 本はサント本の第 22・23 偈を欠くが、Dhīḥ 本が元にした写本（NGMPP B112-17）には、当該の二偈は含まれている。

3.1　異読なし
3.2　ab: svasamayasukham → svasamayaḥ sukham
3.3　* Dhīḥ 本は当偈を含まないため、以下、一偈分ずれる。
3.4　cd: pratyantasiddhyante（Dhīḥ 3.3cd）→ pratyanusidhyante
3.5–6 異読なし
3.7　cd: paramā（Dhīḥ 3.6cd）→ paramāḥ
* 本稿では 7c についてサント本を次のように変更した。
ākāśadhātuparyantā（サント本）→ ākāśadhātvaparyantā
3.8　cd: abhiyoga-（Dhīḥ 3.7cd）→ atiyoga-
3.9　ab: ekasyai caikacāriṇyaḥ sahacaryāntacarāḥpriyāḥ（Dhīḥ 3.8ab）
→ ekasyaivaikacāriṇyaḥ sahacaryānucarāḥ priyāḥ
cd: -ḍākinīparamojjvalaḥ（Dhīḥ 3.8cd）→ -ḍākinyaḥ paramojjvalāḥ
3.10　cd: paramaśāśvataḥ（Dhīḥ 3.9cd）→ paramaśāśvatāḥ
3.11　異読なし

3.12　ab: anayā mudraṇād eva vajrasattvādhidevataḥ（Dhīḥ 3.11ab）
→ anayāmudraṇād eva vajrasattvādhidaivataḥ

3.13　ab: sarvayogasukhotsavāḥ prasajyabala mānavāḥ（Dhīḥ 3.12ab）
→ sarvayogasukhonmattāḥ prasahya balasānaghāḥ

cd: parasparaṃ praharṣayā ramanti puruṣā pi te（Dhīḥ 3.12cd）
→ parasparapraharṣayā ramanti puruṣāyitaiḥ

3.14　cd: sarvapūjā mahāmegha-（Dhīḥ 3.13cd）→ sarvapūjāmahāmegha-

3.15　ab: sarvayogasukhātmakair（Dhīḥ 3.14ab）→ sarvayogasukhāsekair

cd: pramoditāḥ（Dhīḥ 3.14cd）→ pramohitāḥ

3.16　ab: sarvadevyūpabhogais（Dhīḥ 3.15ab）→ sarvadevyupabhogais

* 単純な誤記

3.17　ab: antayogena（Dhīḥ 3.16ab）→ anuyogena

cd: samāśvodayamānaś（Dhīḥ 3.16cd）→ samāsvādayamānaś

3.18　cd: chrīvajrasattvāyuyauvanārogyasatsukham（Dhīḥ 3.16cd）
→ chrīvajrasattvāyuryauvanārogyasatsukham

3.19–20　異読なし

3.21　ab: sauramyamāṇas tu pātyatyutpanatīcchataḥ（Dhīḥ 3.22cd）
→ saṃramyamāṇaṃs tu yāty ety utpatatīcchataḥ

3.22–23　* Dhīḥ 本には含まれない。

3.24　異読なし

3.25　ab: yena yānāsya（Dhīḥ 3.24ab）→ ye ’nayā nāsya

cd: sarvabuddhasamāyogeśvaryamahāsukhāḥ（Dhīḥ 3.24cd）
→ sarvabuddhasamāyogayogaiśvaryasukhotsavāḥ

3.26　cd: ākāśadhātuparyantāḥ sarvaiśvaryasukhotsavāḥ（Dhīḥ 3.25cd）
→ ākāśadhātvaparyantāḥ sarvayogasukhotsavāḥ

3.27　ab: yena yānāsya（Dhīḥ 3.26ab）→ ye ’nayā nāsya

cd: -saṃvaraiḥ（Dhīḥ 3.26cd）→ -śaṃvaraiḥ

3.28　異読なし

3.29　（章題）sarvadevīsamāyogasubhagaśrīvajrasamayakalpas tṛtīyaḥ

→ sarvadevīsamāyogasubhagaśrīsamayakalpas tṛtīyaḥ

* Dhīḥ 本は写本に無い -vajra- を蔵訳から補ったと注記する。

【資料２：第２・３章注釈箇所対照表】

凡例

・下記の D1659、D1660、D1663 はそれぞれ、インドラナーラ注、プラムディタヴァジュラ注、プラシャーンタミトラ注のデルゲ版の番号（東北番号）を示す。

・表中の偈の番号はサント本に従った（サント本と Dhīḥ 本で偈番号が異なる）。

<table>
<tr><th>偈</th><th>D1659</th><th>D1660</th><th>D1663</th></tr>
<tr><td>2.1</td><td>262a5–263a2</td><td>393a5–6</td><td>63b4–6</td></tr>
<tr><td>2.2</td><td>263a2–7</td><td rowspan="2">393a6–b1
（vv. 2.2–2.3ab）</td><td>63b6–64a1</td></tr>
<tr><td rowspan="2">2.3</td><td>263a7–b4
（v. 2.3ab）</td><td rowspan="2">64a1–3</td></tr>
<tr><td>263b4–7
（vv. 2.3cd–4ab）</td><td rowspan="3">393b1–2
（vv. 2.3cd–2.5）</td></tr>
<tr><td>2.4</td><td rowspan="2">263b7–265a1
（vv. 2.4cd–5）</td><td rowspan="2">64a3–5（vv. 2.4–5）</td></tr>
<tr><td>2.5</td></tr>
<tr><td>2.6</td><td>265a1–4</td><td rowspan="2">393b2–4
（vv. 2.6–7）</td><td>–</td></tr>
<tr><td>2.7</td><td>265a4–6</td><td>–</td></tr>
<tr><td>2.8</td><td>265a6–b2</td><td rowspan="2">393b4–6
（vv. 2.8–9）</td><td></td></tr>
<tr><td>2.9</td><td>265b2–5</td><td>64a5–6</td></tr>
<tr><td rowspan="2">2.10</td><td>265b5–7
（v. 2.10ab）</td><td rowspan="5">393b6–7
（vv. 2.10–13）</td><td rowspan="2">64a6–7</td></tr>
<tr><td rowspan="2">265b7–266a3
（vv. 2.10cd–11ab）</td></tr>
<tr><td rowspan="2">2.11</td><td rowspan="2">–</td></tr>
<tr><td>266a3–7
（v. 2.11cd）</td></tr>
<tr><td>2.12</td><td>266a7–b3</td><td>64a7</td></tr>
<tr><td>2.13</td><td>266b3–6</td><td>–</td></tr>
<tr><td>2.14</td><td>266b6–267a2</td><td>393b7–394a2</td><td>64a7–b1</td></tr>
<tr><td>2.15</td><td>267a2–6</td><td>394a2–3</td><td>64b1</td></tr>
<tr><td>2.16</td><td>267a6–b2</td><td>394a3–4</td><td>–</td></tr>
</table>

2.17	267b2–5	394a4–6	64b1–2
2.18	267b5–268a1	394a6–7	64b2
2.19	268a1–4	394a7–b2 （vv. 2.19–20cd）	64b2–4
2.20	268a4–b1		64b4–6
2.21	268b1–3	394b2–3 （vv. 2.20ef–22）	64b6–7 （vv. 2.21–22）
2.22	268b3–269a3 （vv. 2.22–23）		
2.23		394b3–4	64b7–65a1
2.24	269a3–7	394b4–5	65a1–3
2.25	269a7–b3	–	–

偈	D1659	D1660	D1663
3.1	269b3–270a3	394b5–6	65a3–4
3.2	270a3–7	394b6–7	–
3.3	270a7–b2	394b7–395a4 （vv. 3.3–7）	65a4–6
3.4	270b2–5		65a6–7 （vv. 3.4–6）
3.5	270b5–7		
3.6	270b7–271a2		
3.7	271a2–b6		65a7
3.8	271b6–272a5	395a4–6	65a7–b3
3.9	272a5–b3	395a6–7	65b3–4
3.10	272b3–273a3	395a7–b1	65b4–5
3.11	273a3–6	395b1–3	65b5–6
3.12	273a6–b3 （vv. 3.12–13）	395b3–4	65b6
3.13		395b4–7	65b6–66a1
3.14	273b3–7	395b7	66a1
3.15	273b7–274a4	395b7–396a2	66a1–3

3.16	274a4–b1	396a2–3	66a3
3.17	274b1–3	396a3–4	66a3–4
3.18	274b4–6	396a4	66a4
3.19	274b6–275a5	396a4–5 (vv. 3.19–20)	66a4–5
3.20	275a5–b4		66a5
3.21	275b4–276a2	396a5–b1 (vv. 3.21–22)	66a5–6
3.22	276a2–4		66a6–7
3.23	276a4–b5 (vv.3.23–24)	–	–
3.24		–	–
3.25	–	–	–
3.26	–	–	–
3.27	276b5–7	–	66a7–b2

【資料 3：プラムディタヴァジュラ注による第 2・3 章の科段】

第 2 章

［2.1：多方便の導入］

［2.2–3ab：多方便の瑜伽］

［2.3cd–5：行（caryā）］

［2.6–7：禁戒（vrata）］

［2.8–9：真実］

［2.10–13：成就］

［2.14：ガナチャクラ］

［2.15：曼荼羅未入壇者の初地の智］

［2.16：ガナチャクラの利徳］

［2.17：愛着の道］

［2.18：ガナチャクラの行］

［2.19–20abcd：四瑜伽の修習］

［2.20ef–22：サルヴァヨーガ］

［2.23：アヌヨーガ］
［2.24：アティヨーガ］

第３章
［3.1：甚深の導入］
［3.2–7：六部族のムドラー］
［3.8–11：六部族共通の法のムドラー］
［3.12–18：六部族のマハームドラー］
［3.19–27：悉地：身・語・心・供養・功徳の五種等］

【資料４：プラシャーンタミトラ注における根本タントラと続タントラへの言及】

前稿では、本書が「根本タントラ」（mūlatantra）と呼ばれ、*Sarvakalpa-samuccaya* が「続タントラ」（uttaratantra）と呼ばれる点について、その典拠となるインド撰述資料を紹介した。そしてその一方で、本書を「続タントラ」と呼ぶインド撰述資料の例についても紹介した（蔵訳においても本書は「続タントラ」とされる）。以下に提示するのは後者の補足資料としての、プラシャーンタミトラによる注釈の冒頭箇所である。そこでは、本書が仏説でありながらもその冒頭に「如是我聞一時」の定型句を欠如するのはなぜなのかという問いが発せられ、その理由をめぐって二つの説が紹介される。

一つめは、「如是我聞一時」で開始する一般の経典は世尊の般涅槃後に説かれたことを示す一方で、『サマーヨーガ』は世尊の無住処涅槃を示すために、敢えて「如是我聞一時」を説かないという説である。

二つめは、本書（1200 頌の分量）が巨大な根本タントラからの抜粋にすぎず、本書はその抄本（抜粋集）という意味で「続タントラ」（rgyud phyi）と呼ばれるのであり、それゆえに「如是我聞一時」云々は、抄本たる本書には欠如するという説である。しかし大本たる根本タントラの冒頭部には存在するのだから問題はないという[74]。

74　このような実在性の疑わしい「根本タントラ」の存在は、様々なタントラ文献についても同様に主張される。

この第二の説が、本書を「続タントラ」とする説である[75]。すなわち、本書を続タントラと位置付ける伝統は、プラシャーンタミトラが活躍した年代（9 世紀頃か）には存在したことがわかる[76]。この二つの説が現れる箇所は下記の通りである（D1663, 58b7–59a3）。

［論難］’dir kha cig na re ci’i phyir rgyud ’dir mgo la sdud par byed pas | ’di skad bdag gis thos pa zhes bya ba la sogs pa gleng gzhi ma（59a1）bstan zhes rgol bar byed pa la |
［答 1］la la dag gis bshad pa | bcom ldan ’das yongs su mya ngan las ’das pa na | rigs kyi bu dag nga yongs su mya ngan las ’das nas | khyed rnams kyis dam pa’i chos rnams bsdu bar bya ste || thams cad kyi dang por ’di（59a2）skad bdag gis thos pa’i dus gcig na zhes bya ba byos shig ces gsungs la | bcom ldan ’das ni mi gnas pa’i mya ngan las ’das pa’o zhes rab tu bstan pa’i phyir te | de bas na rtag tu bzhugs zhes bya ba’i rim pa ’di nyid kyis mngon no ||
［答 2］gzhan dag na re ’khor los（59a3）sgyur ba chen po mngon sum du ston par gyur pas（ → pa’i）rgyud shlo ka khri nyis stong sum brgya pa gsungs pa las stong nyis brgya pa ’di ni rgyud phyi ma yin te | de bas na der dang po rtsom pa na gleng gzhi grags zin pas ’dir yang ma smras so zhes ’dod do ||

（訳）［論難］ここである人たちは、なぜこのタントラでは冒頭において、結集者（saṅgītikāra）が「如是我聞」（evaṃ mayā śrutam）云々という序分（nidāna）を述べないのかと論難する。
［答 1］別の人たちは［次のように］説明する。世尊が涅槃したときに、「善男子よ、私が涅槃した後、あなたたちは正法を集めて、すべて［の経典］の冒頭に、『如是我聞一時』と述べよ」とお説きになったが、［このタン

75　広本から抽出された略本を uttaratantra とする例として、*Mālinīvijayottaratantra* がある。Vasudeva 2004 を参照。
76　プラシャーンタミトラ注の年代については伊集院ほか 2019: 68 参照。

トラでは、］世尊が無住処涅槃した（つまり輪廻にも涅槃にも固定されず遍在する）ことを示すからである。それゆえ、「［世尊は］常に居られる」（sadā sthitaḥ, 1.1b）というこの［言説の］次第によって［世尊が無住処涅槃したことがタントラの中で］明かされている。

［答 2］さらに別の人たちはいう。大転輪王が直接にお説きになった 12300 のシュローカ（khri nyis stong sum rgya pa）で語られたタントラ（大本としての根本タントラ）[77] から［抜粋された、］1200（stong nyi brgya pa）［シュローカからなる］本書（抄本）は、**ウッタラタントラ**であり、それゆえ、そこ（大本）の中において、最初に著作されたときに、［如是我聞を含む］序分（nidāna）は既に説かれ終わっているので、ここ（抄本）の中では、［その序分は］繰り返して説かれなかった、と主張する。

参考文献一覧

（一次資料）

Samāyoga『サマーヨーガ・タントラ』*Sarvabuddhasamāyogaḍākinījālasaṃvara*.（1）Ed. Central Institute of Higher Tibetan Studies, *Dhīḥ: A Journal of Rare Buddhist Text* 58, 2018, pp. 141-201.（Dhīḥ 本と略す。Dhīḥ 本の底本の梵文写本 NGMPP B112/17 を併せて参照した。）（2）Ed. P.-D. Szántó, The *Sarvabud dhasamāyogḍākinījālaśaṃvara*, forthcoming.（サント本と略す。サント本の底本の梵文写本であるコレージュドフランスのインド学研究室図書館所蔵 IÉI SL 48 については、伊集院ほか 2019 を参照。）

（二次資料）

（和文）

伊集院栞、加納和雄、倉西憲一、ピーター・ダニエル・サント

2019　「梵文和訳『サマーヨーガ・タントラ』第 1 章」『大正大学綜合仏教研究所年報』41, 61–100 頁。

大塚伸夫

2013　『インド初期密教成立過程の研究』春秋社。

77　なお『サルヴァカルパサムッチャヤ』の奥書には、同書が「1 万 8 千」（khri brgyad stong pa, D367, 212a6–7）詩節分の分量の『サマーヨーガ・タントラ』に基づく旨に言及する。

高橋尚夫
1997　「Jñānasiddhi 第十五章」『豊山教学大会紀要』5、1–16 頁。
田中公明
2010　『インドにおける曼荼羅の成立と発展』春秋社。

（欧文）
Chakravarti, Chintaharan
1984　*Guhyasamājatantrapradīpodyotanaṭīkā-ṣaṭkoṭivyākhyā*. Tibetan Sanskrit Works Series 25. Patna: Kashi Prasad Jayaswal Research Institute.
Tomabechi, Tōru
2006　*Étude du Pañcakrama: introduction et traduction annotée*. ローザンヌ大学、博士号請求論文 .
Vasudev, Somdev
2004　*The Yoga of the Mālinīvijayottaratantra*. Collection Indologie 97. Pondichéry: Institut français de Pondichéry, Ecole française d'Extrême-Orient.
Wedemeyer, Christian
2007　*Āryadeva's Lamp that Integrates the Practices (Caryāmelāpakapradīpa): The Gradual Path of Vajrayana Buddhism According to the Esoteric Community Noble Tradition*. New York: American Institute of Buddhist Studies.

（令和元年度科学研究費［17H04517］［17K02222］［18H03569］［18K00074］［19K00062］による研究成果の一部。本稿の作成に際しては種村隆元氏から多くの助言を頂いた。）